

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 7 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2018～2021

課題番号：17K13355

研究課題名(和文) 両大戦間期のイギリスにおける趣味論と前衛美術の総合的研究

研究課題名(英文) British Theories of Taste and Avant-Garde Art Between the Two World Wars

研究代表者

石井 祐子 (ISHII, Yuko)

九州大学・基幹教育院・准教授

研究者番号：60566206

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、イギリス美術における「趣味(taste)」への志向が、同地での前衛的美術の展開と互いにどのような作用を及ぼし合ったのかを明らかにすることを目的とした。そのためにも、
「よき趣味」の規範化に関わる同時期の美学的言説とその実践の場[A]における趣味論の射程を考察し、そこでの前衛美術の位置付けを明らかにした。次に、同時期のマスメディアと密接な関連を持つ視覚文化[B]における趣味の受容や教化、伝播や自律的展開のダイナミズムを考察し、そこにおける前衛美術の役割を考察した。以上の成果をうけて、上記[A][B]の領域を横断する同時期の前衛美術[C]の領域を見極め、その概念モデルを再構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、考察の拠点を上記[A][B]いずれかの領域に限定することなく、また二点考察ではなく[C]を含めた三点の有機的連関を探ることによって、両大戦間期のイギリスにおける趣味論と前衛美術の立体的な言説空間と実践が浮き彫りとなった。このことは、同テーマをめぐって、純粹芸術/応用芸術、エリート/大衆といった二項間の単線的な関係性ではなく、その重層的な様相を捉えることを可能とした。イギリス趣味論の歴史の中で、趣味判断のアポリアともいえる前衛的芸術の位置付けを明らかにすることによって、趣味論と「キッチュ」や「悪趣味」をめぐる社会的、歴史的、政治的読み直しが今後さらに充実することが期待される。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to clarify how the aspiration toward 'taste' in British art interacted with the development of avant-garde art in the inter-war period. To this aim, this study first examined the scope [A] of the aesthetic discourse of the same period concerning the normalisation of 'good taste' and its field of practice and identified the position of avant-garde art in this discourse. Next, the study examined the dynamism of the reception, indoctrination, diffusion and autonomous development of taste in visual culture [B], which was closely related to mass media of the same period, and considered the role of avant-garde art in this context. Based on the above results, it identified the area of avant-garde art [C] of the same period that traversed the above areas [A] and [B] and reconstructed its overall conceptual model.

研究分野：美術史

キーワード：イギリス美術 趣味論 シュルレアリスム Taste ハーバート・リード

1. 研究開始当初の背景

イギリスと「趣味 taste」論の関係は深い。哲学、美学の領域における美的価値判断の能力としての趣味に関する議論は、とくに 18 世紀イギリスで第 3 代シャフツベリ伯 (1671-1713) や E.パーク (1729-1797) らによって隆盛し、この時代は「趣味の世紀」(George Dickie, *The Century of Taste: The Philosophical Odyssey of Taste in the Eighteenth Century*, Oxford University Press, 1996) とさえ呼ばれるほどである。あるいは、デザインの領域では、ヴィクトリア女王の時代以降、国家的なデザイン戦略として「よき趣味」を様々な手法で規範化しようと試行錯誤したことはよく知られている。(菅靖子『イギリスの社会とデザイン モリスとモダニズムの政治学』彩流社、2005 年等。)こうしたイギリスの文化芸術と趣味の問題をめぐる盛んな議論は、フランスをはじめとする「大陸」の芸術との関係やナショナル・アイデンティティとも関連し、各々の分野で多様なアプローチで論じられおり枚挙に暇がない。

一方、イギリス美術史において趣味の問題は、ヴィクトリア朝時代や産業革命期後の 18 世紀から 19 世紀に議論が集中する傾向があり、それらの研究は主に様式史のアプローチ、あるいは社会史のアプローチを採ってきた。前者は、日本趣味や東洋趣味など、主題や様式的流行に着目し (Elizabeth Aslin, *The Aesthetic Movement: Prelude to Art Nouveau*, Elek, 1969 等) 後者は、作品の蒐集やパトロネージ、美術作品の注文・受容・評価等の問題と趣味の歴史との相関関係を考察する。(Francis Haskell, *Past and Present in Art and Taste: Selected Essays*, Yale University Press, 1987 等。)

以上のような研究動向は、1990 年代以降さらに方法や観点が多様化し充実してゆくが、20 世紀の前衛美術、とりわけダダやシュルレアリスムといった芸術思潮と趣味論との関係を考察する研究は未だ十分になされていない。(20 世紀の西欧における「前衛」美術とは何か、という問題は様々な議論されているが、ここでは歴史上「前衛」をめぐる言説と深く結び付けられてきたシュルレアリスムの動向も対象として含む。)その理由としては、そもそもこの時期のモダン・アートをめぐる当事者たちの言説や美術批評において、当代的「趣味」は保守的なもの、個人的なもの、移ろうもの、表層的なものとして捉えられがちであったことが挙げられるだろう。加えて、とくに芸術の既成概念を問い直したダダやシュルレアリスムでは、従来の趣味判断では唾棄されるべきキッチュ(悪趣味、低俗、陳腐など)の表現を積極的に採り入れており、いわゆる純粋芸術や高級文化を中心とする制度の中で形成される趣味論の範疇では扱いきれないテーマであったと考えられる。また、美的趣味判断の具体的実践は、理念や思考の様態というよりも、形式や視覚的形態と結びつくことが多いため、キュビズム等の動向と異なり特定の様式を持たないダダやシュルレアリスムは議論の対象となりにくい。しかし、ここでいう「趣味」は個人を超え、それ自体がある文化的集団の卓越や正当性に関わるイデオロギー的なものである。そして、シュルレアリスムにおいて「悪趣味」もまたひとつの美学的価値判断に深く関わっている。

研究代表者は本研究開始当初まで、シュルレアリスムの美術をめぐる諸問題を研究し、とくに近年は両大戦間のイギリスにおけるシュルレアリスムの受容・展開について考察を深めてきた。とりわけ、コレクターや画廊における蒐集・展示の諸相や、当時の新聞や雑誌などのメディアにおけるシュルレアリスム受容・評価の言説を分析し、作家たちの具体的制作との相互関係についても検討を進めていた。そうした研究を通じて、1930 年代のシュルレアリスム受容においてもまた、「よき趣味」への志向が避けて通ることのできない問いとして浮かび上がった。また、前衛の実践者としての芸術家たちも、趣味の概念を排除したのではなく再構成したのではないかという仮説を得た。それらの内実を検討することによって、20 世紀のイギリスにおける前衛美術の実践と受容の新たな側面を立体的に捉えることが可能となる。以上が、本研究課題の着想に至った経緯である。

2. 研究の目的

本研究では、20 世紀(とりわけ両大戦間期)のイギリス美術における「趣味 (taste)」への志向が、同地での前衛美術の展開と互いにどのような作用を及ぼし合ったのかについて、美学的言説、生活空間や大衆文化、前衛美術の具体的実践の領域の有機的連関から明らかにすることを目的とした。イギリス美術が強迫的なまでに固執した「よき趣味」をめぐる言説空間の中で、ダダやシュルレアリスムといった 20 世紀の反美学的な前衛表現は、いかに拒絶、許容、受容されたのか。その選択の論理と展開を具体的作品との関わりから考察すること。また、反対に、前衛美術はいかにして英国的趣味の「伝統」と格闘したのか。これらを双方向的に明らかにし、20 世紀イギリス美術における趣味論のアポリアに切り込むことを目指した。

3. 研究の方法

上記の目的のため、本研究では主に以下の三つの研究課題を設定した。

- (1) 両大戦間期の美学的言説とその実践の場〔A〕(「よき趣味」の規範化に関わる領域)における趣味論の射程を考察し、前衛美術との関わりと位置付けを明らかにする。
- (2) 同時期のマスメディアと密接な関連を持つ視覚文化〔B〕(受容や伝播に関わる領域)における趣味論のダイナミズムと前衛美術との関わりを考察する。
- (3) 上記〔A〕〔B〕の領域を横断する同時期の前衛美術〔C〕の領域を見極め、全体の概念モデルを再構築する。

本研究では、当該テーマに関わる一次資料や関連作品の分析という美術史学的手法を基盤としつつ、デザイン学や思想史、視覚文化論での議論における理論的枠組も参照した。具体的には、以下のようなプロセスで研究を行った。研究課題(1)については、前衛美術(とりわけシュルレアリスム)の受容と展開において重要な拠点となる都市や施設の大まかな全体像を把握したうえで、特に重要な考察対象となるロンドンの主要画廊や美術館、コレクターについてイギリスの各アーカイヴ等で渡航調査を行った。同地で収集した未刊行資料を含む史資料を分析するとともに、同時期の美学的言説との関わりから考察した。研究課題(2)については、特にエフェメラやアーカイヴ化されていない一次資料も多く、渡航調査が必要であったが、世界的な感染症拡大の影響により移動が制限されたため、インターネットで公開されたアーカイヴや文献復刻集成等も積極的に利用した。研究課題(3)では、各課題での言説、作品、質的・量的データに関する分析を総合し、全体の概念モデルを検討した。その成果は、国際シンポジウム等の場で発表するとともに、英国の研究者と議論を行い考察を深めた。

4. 研究成果

本研究では、イギリス美術における「趣味(taste)」への志向が、同地での前衛美術の展開と互いにどのような作用を及ぼし合ったのかについて、美学的言説、マスメディアと結びついた生活空間や大衆文化、前衛美術の具体的実践という三つの観点から考察することによって、それらの有機的連関や立体的な諸相を明らかにすることができた。本研究を通じて、両大戦間期イギリスの前衛芸術をめぐる趣味論のみならず、20世紀美術の価値判断全体に関わる問題を、純粹芸術/応用芸術、エリート/大衆、よき趣味/悪趣味といった二項間の単線的な関係性ではなく、その重層的な相互関係から捉え直すことができた。以下、各年度の進行に従って成果の概要をまとめる。

研究開始年度の2018年度は、主に研究課題(1)に従事し、具体的に以下の三点を中心に考察した。ロンドンをはじめとする大都市部の画廊や美術館、コレクターの蒐集と展示の活動において、どのような作品が好まれ、退けられたかを一次資料から跡付ける。そのような傾向を支え、あるいは覆してゆく言説を、前衛美術との関わりから美術雑誌や評論家・美術史家の著作等のテクストから紐解く。前衛美術の当事者たちが、上記のような美術市場や展示空間、言説空間に対し、どのようにアピールしたのか。その論理、方法、戦略の内実を具体的作品と各々の言説から検証する。

1910年代以降は、ポスト印象派の影響が大きく、その後1920年代までにマティスらの作品が、そして1930年代までにピカソのキュビズム期の作品が画商やコレクターらの注目を集める一方で、1930年代からはメイヤー画廊(ロンドン)をはじめとしてシュルレアリスムの紹介が活発となる。ただし、この時期のイギリスにおけるシュルレアリスムの紹介は、あくまでフランスを中心とする「大陸」のモダン・アートやクラシックな流れと結び付けられ、抽象的なイメージが好まれていた。展覧会に関する新聞記事や雑誌の展評においても、あからさまな性愛表現や具象的シュルレアリスムのイメージは、少なくとも1930年代後半までほとんどみられないことを確認した。

そうした状況のなか、本研究でとくに重要なのはハーバート・リードの言説である。リードは、1930年に自身の好み(preferences)の古典的傾向を告白しつつキュビズムや抽象美術を論じる一方で、1930年代半ば以降急速にシュルレアリスムに傾倒した。1935年には、「なぜイギリス人には趣味がないのか」という記事を発表し、イギリスで性や死の問題が回避される保守的傾向にあることを「精神の死」として描写した。リードは、それを覆すものとして、衝撃や嫌悪、驚きといったシュルレアリスムの価値を認めている。それはシュルレアリスムの社会的かつ思想的革命の意義を強調するものでもあり、ここにおいて、イギリスの趣味論でよくみられる社会的善としてのよき趣味への回路がシュルレアリスムにもひらかれたと考えられる。

以上のような成果の一部は、以下の研究発表で公表した。とくに、「Galleries in Cork Street and the U.K. Reception of Surrealism in the 1930s」は上記の研究課題に関わる。また、「シュルレアリスムの展覧会とカタログ(1)」や「マックス・エルンストを読む：自伝的覚書をめぐる自己同一性の逆説」は、上記研究課題に関連し、シュルレアリスムやそれに深く関わった芸術家たちが、どのように自らを提示し、どのように受容されたのかについて考察している。

2019年度は、研究課題(2)として、同時期のマスメディアと密接な関連を持つ視覚文化〔B〕

(受容や伝播に関わる領域)における趣味論のダイナミズムと前衛美術との関わりを考察した。具体的には、ファッション誌や映画・演劇等のスペクタクルなどで提示されるイメージや言説を分析し、大衆文化や消費文化の中で実際に流通していた趣味判断の様相〔B〕を精査することを試みた。夏には英国に渡航調査を行い、ヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアムやテートのアーカイヴで関連する史資料を入手した。その結果、いわゆる純粋美術や美学的言説と相異なる部分、重なる部分を比較検討することが可能となり、趣味の教化や自律的展開のあいだで揺れ動く〔B〕の領域のダイナミックな様相が明らかとなった。本研究課題では、デザイン史や視覚文化史での研究成果を踏まえつつ、モダン・アートの視覚的形式のみならず前衛美術の理念的側面が、一般大衆の中で両義的に受容されたことを広く考察することができた。

また、当該年度には、1930年代後半のイギリスでシュルレアリスムを広く一般大衆にも浸透させる大きな契機の一つとなったシュルレアリスム国際展(ニュー・バーリントン画廊、1936年、ロンドン)とその受容を改めて考察する中で、国外への波及や他の国際展との比較考察も行うことができた。それらの成果の一部は、2019年度の国際学会での口頭発表、およびその後公表された査読論文に反映された。

2020年度と2021年度は、研究課題(3)として、上記〔A〕〔B〕の領域を横断する同時期の前衛美術〔C〕の領域を見極め、全体の概念モデルを再構築した。具体的にはまず、これまでの研究成果に基づき、前衛美術が趣味判断の問題において〔A〕および〔B〕の領域とどのように関与したのかについて比較考察した。次いで、前衛美術に関わった芸術家、理論家、批評家、パトロン等が、どのようにして(どのような論理で)前衛美術を「よき趣味」の問題圏に布置したのか、あるいは具体的にどのような戦略でそこから距離を取り、いかなる結果をもたらしたのかについて総合的に考察した。1910年代からすでに顕在化しているように、モダニズムは「大衆」と敵対していた一方で公共性や市場を放棄したわけではなかった。そのことは、ロジャー・フライによる1910年と1912年のポスト印象派展やブルームズベリー・グループの活動、オメガ・ワークショップなどにも顕著である。フライが死去する前年(1933年)に『バーリントン・マガジン』の編集者に就任したハーバート・リードもまた、シュルレアリスムとの関わりを足掛かりとしてモダニズムや前衛美術の民主化や公共的推進を図った。本研究課題では、これまでに検討した1936年のシュルレアリスム国際展をめぐる論点を20世紀前半の記念碑的展覧会との比較考察にもひらくことで、研究テーマに幅広く取り組むことができた。とくに、ロンドン・シュルレアリスム国際展の実行委員会メンバーの展覧会組織戦略が、フライのポスト印象派展と共通する点が多いこと、当時の新聞記事においても両者を結びつける言説があることは重要な点である。その他、各研究課題全体の考察を踏まえ、〔A〕〔B〕〔C〕の概念図それ自体を再構築した。これまでの研究によって、各々の領域の複雑な位相の重なり合いがみえてきたが、その様相を丁寧に整理し、両大戦間期のイギリスにおける前衛美術と趣味論のダイナミズムと厚みを新たな概念モデルとして考察した。

本研究課題は当初三年の研究期間を予定していたが、研究代表者のライフイベントによる中断や世界的な感染症拡大の影響により延長された。最終年度まで引き続き国内外の移動の制限が行われたため、関連する渡航調査等において中止を余儀なくされたものもある。とくに、大衆文化や消費文化に関わる資料は未刊行のもの、エフェメラルなものも多く含まれており、また研究代表者のこれまでの研究の範囲を超えるものについてはさらなる現地調査が必須となる。そうした史資料の分析が必要な論点については、今後も継続的に研究を進め、次なる研究課題に繋げたい。また、(戦後も含めた)悪趣味への文化的関心やその社会的倫理との関係といった観点からもより考察を深めたい。

一方で、国内での研究を余儀なくされたことにより、本研究の着眼点や計画を(研究目的を逸脱しない範囲で)多少修正して研究を遂行することもできた。とくに、日本での英国趣味(論)の受容の問題や比較検討にも考察を伸張し、英国の研究者と国際シンポジウムの場で議論できたことは、本研究の次なる展開をひらいたという意味でも有意義であった。上記テーマについては、1930年代のハーバート・リードやローランド・ペンローズ、ポール・ナッシュらの活動との関わりから考察した論考を、グラスゴー大学と共同で開催した2件の国際シンポジウムで口頭発表した。同シンポジウムの報告集は2022年に刊行予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 石井祐子	4. 巻 33
2. 論文標題 「海外超現実主義作品展」（1937年）における複製写真展示の意義：シュルレアリスム「国際」展の観点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 藝術研究	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 石井祐子	4. 巻 1
2. 論文標題 1930年代のエルンスト：その活動と受容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福沢絵画研究所R通信	6. 最初と最後の頁 2-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 ISHII Yuko	4. 巻 -
2. 論文標題 Exhibiting Surrealism: The Reception of Surrealism in Japan from a Viewpoint of the Gallery Space	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Surrealisms 2019, the 2nd conference of the International Society for the Study of Surrealism (ISSS)	6. 最初と最後の頁 24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 石井祐子	4. 巻 36
2. 論文標題 「会員の本」（Michael Richardson, et al. (eds.), The International Encyclopedia of Surrealism, Bloomsbury Visual Arts, London, 2019）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 デアルテ	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石井祐子	4. 巻 78
2. 論文標題 シュルレアリスムの展覧会とカタログ(1)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 哲学年報	6. 最初と最後の頁 105-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石井祐子	4. 巻 6
2. 論文標題 シュルレアリスム美術における展覧会の機能: 展覧会カタログの観点から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 WASEDA RILAS JOURNAL	6. 最初と最後の頁 496-497
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 ISHII Yuko	4. 巻 2
2. 論文標題 Galleries in Cork Street and the U.K. Reception of Surrealism in the 1930s	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 第2回九州大学女性研究者ダイバーシティシンポジウム予稿集	6. 最初と最後の頁 11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計7件(うち招待講演 1件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 ISHII Yuko
2. 発表標題 The Encounters Obscured: Pre-War Japanese Avant-Garde Artists and British Modern Art
3. 学会等名 Islands in the Global Age: Identification, Estrangement and Renewal in the East-West Dialogue (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 ISHII Yuko
2. 発表標題 A Letter from Roland Penrose: Exchange between Surrealism in Britain and Japan
3. 学会等名 Scoping Event Glasgow-Kyushu Research Collaboration in the Arts and Humanities (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石井祐子
2. 発表標題 1937年のシュルレアリスム「国際」展(日本サロン)と複製写真
3. 学会等名 第17回シュルレアリスム美術を考える会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石井祐子
2. 発表標題 1930年代のエルンスト：その活動と受容
3. 学会等名 「福沢絵画研究所R」第1回研究会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石井祐子
2. 発表標題 マックス・エルンストを読む：自伝的覚書をめぐる自己同一性の逆説
3. 学会等名 シュルレアリスム美術を読む：第2回ワークショップ
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ISHII Yuko
2. 発表標題 Galleries in Cork Street and the U.K. Reception of Surrealism in the 1930s
3. 学会等名 第2回 九州大学女性研究者ダイバーシティシンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ISHII Yuko
2. 発表標題 Exhibiting Surrealism: The Reception of Surrealism in Japan from a Viewpoint of the Gallery Space
3. 学会等名 Surrealisms 2019, the 2nd conference of the International Society for the Study of Surrealism (ISSS) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Michael Richardson, Dawn Ades, Steven Harris, Krzysztof Fijalkowski, Georges Sebbag, (eds.)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Bloomsbury	5. 総ページ数 Three-volume set
3. 書名 The International Encyclopedia of Surrealism	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関

英国	University of Glasgow			
----	-----------------------	--	--	--